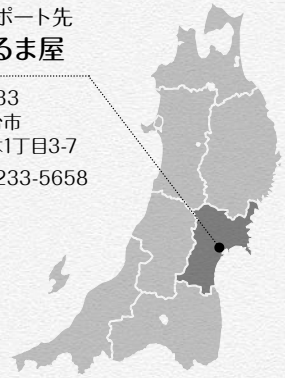
とうほく元気レポート



今回のレポート先
本郷だるま屋

〒981-0933
宮城県仙台市
青葉区柏木1丁目3-7
TEL 022-233-5658

みんなの思いを背負った伊達な青いだるまさん

1985年に宮城県の伝統的工芸品に指定された仙台張子（はりこ）。その代表格である「松川だるま」は、新春の縁起物として、仙台市民に広く親しまれてきました。現在は、その独自の技術を「本郷だるま屋」10代目の本郷久孝さん・尚子さんご夫妻が継承していますが、東日本大震災の影響で材料が手に入らなくなり、一時は休業も考えました。

しかし、だるま作りを続けることを決意させたのは、お客さまの松川だるまへの思いでした。

庶民の心のよりどころとして誕生

松川だるまは、和紙を型抜きして絵を描いた張子玩具の一種で、江戸時代後期から仙台で作られ続けてきました。天保の大飢饉で飢えに苦しむ人々の心のよりどころにしようと伊達藩の藩士・松川豊之進が作ったのが最初と伝えられており、同じく伊達藩士であった本郷久三郎が豊之進に弟子入りし、その技術やだるまの木型を受け継ぎました。

現在の久孝さんと尚子さんは10代目。ご夫妻で、久孝さんの母であり約60年間にわたって松川だるまを作り続けてきた9代目けさのさん（故人）から教わった技術を大切に継承しています。

みやぎ県伝統的工芸品の仙台張子。左からすずめ、俵牛、虎

10代目の本郷久孝さん・尚子さんご夫妻

側面の梅の絵は「寿」の字をアレンジしたもの。また、一般的なだるまよりスマートな体形も松川だるまの特徴です

写真右から、胴体に宝船を貼った「宝船」、大黒様や恵比寿様が据えられた「玉入り」、燭台が描かれた「並」

伊達の派手好みに合わせた色使い

だるまと言えば全体が赤く塗られているのが一般的ですが、松川だるまは顔の周りが群青色で縁取られ、頭には金色が散らされています。群青色は空と海を表し、豪華な色使いは派手好きと言われる伊達の武将の好みに合わせたもの。初めから両目が入っているのも特徴で、「四方ににらみを利かせて家を守るため」とのこと。独眼の伊達政宗に配慮したとも言われています。

種類は、胴体に宝船を貼った「宝船」、大黒様や恵比須様が据えられた「玉入り」、燭台が描かれた「並」の3種類。サイズは、3寸(約9㎝)から3尺(約91㎝)までありますが、「最近は家の広さの関係で2尺以上はめったに出ませんね」と久孝さんは話します。

修復作業中のだるま

180年ほど前からずっと使われ続けてきた木型。松の一本木から作られています

180年間継承されてきた松川だるまの技術
(写真は1965年頃のだるま作りの様子)

だるまへの思いに後押しされて

約180年間、脈々と受け継がれてきた松川だるまですが、東日本大震災の大津波の影響で糊の原料となる三陸産の角叉(つのまた)(紅藻類スギノリ目の海藻)が入手できなくなり、一時は休業を考えたそうです。

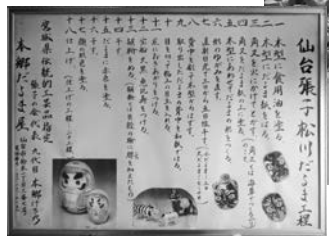
休業を思いとどまらせたのは、松川だるまを大事にしてくださるお客さまの思いでした。震災直後に、壊れただるまを抱えて修理に訪れた人、「だるまに命を守られた」とお礼に来てくれた人、新しい船をだるまに守ってもらおうと買い求めてくれた人など、多くのお客さまがいました。「みんなの思いや願いを背負っている。この人たちのためにも作り続けるのが使命だと思いました」と尚子さんは振り返ります。

18工程にも及ぶ伝統的なだるま作り

本郷だるま屋では、久孝さんと尚子さん、吉岡敏広さんの3人が昔ながらの手法でだるまを制作しています。木型に油を塗り、角叉を煮出した糊で和紙を重ね貼りして体(生地)を作ります。天日で乾燥させたら木型から外し、切り口を和紙で貼ります。粘土の目玉を入れて、底に〝起き上がり〟と呼ばれる土台を接着した後に、宝船や大黒様などの飾りを付けます。そして全体に胡粉を塗って乾かしてから、顔以外を赤一色に塗ります。

ここからは作業も大詰め。顔に肌色を塗ってから、眉やひげ、口などを描く仕上げの作業に入ります。作業場の隅に貼ってあった工程表を数えてみると、仕上げまで18もの工程がありました。

「起き上がり」と呼ばれる粘土の土台を貼り付けることで「七転び八起き」のだるまになります



9代目けさのさんが記した工程表

全身に胡粉（貝殻の粉末などから作られる白色の絵の具）が塗られた白いだるま

過ごし方で選ぶのがポイント

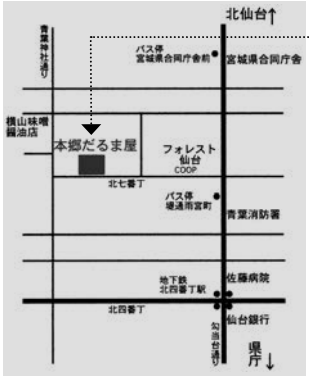
「だるま作りはお米と同じで1年を通しての作業なんです」。春先に生地を作り、夏には粘土で土台を作り、乾かして貼り付ける、絵付けなどの重要な作業は年末に―松川だるまは、細やかな作業を1年間コツコツと積み重ねて作られているそうです。

伺った時は仕上げの真っ最中。3人は慣れた手つきで、一筆一筆丁寧に丹精込めて模様を描いていました。最後に目を描き入れて完成です。手作業なので、見比べると微妙に顔の表情が違います。「どのように過ごしたいかでお選びください」と尚子さん。「がんばるぞ」という人はきりりと引き締まった顔を、「穏やかに過ごしたい」という人はほんわかした顔を、とのことです。

天日干しのため、天候によって仕上がりも変わってくるそうです

だるまを手に取るお客さまのことを考えながら、一筆一筆丁寧に丹精込めて仕上げていきます

本郷だるま屋



本郷だるま屋

〒981-0933
宮城県仙台市青葉区柏木1丁目3-7
T E L:022-233-5658
営業時間:午前9時～午後7時まで
定 休 日:不定休

「本郷だるま屋」の商品がご購入いただけます

彩りそえる しまぬき
〒980-0811
宮城県仙台市青葉区一番町3丁目1-17
TEL:022-223-2370

せんだいメディアテーク
〒980-0821
宮城県仙台市青葉区春日町2-1
TEL:022-713-3171

お客さまの要望から生まれた「合格だるま」

久孝さん、尚子さんご夫妻とお孫さん。写真中央は吉岡さん

だるまに導かれた縁を大切に

帰り際に「こんなだるまもありますよ」と見せてくれたのが、顔周りの群青色など松川だるまの伝統はそのままに、お腹の部分に「合格」の文字を描いた合格だるまです。お客さまの要望に応えて作ったもので「力をいただいた」とお礼に来る人もいるそうです。

「合格した方が、『真っ先に本郷さんに知らせたい』と来てくれた時は、だるまを作り続けてよかったと心から思いました」と尚子さん。また最近は、新春の縁起物としてだけでなく、結婚式のご祝儀やインテリアとして買い求め、飾り方を聞きに来る若い人も多いとか。

「松川だるまは、『だるまに導かれた縁』で守られてきた」というのが9代目けさのさんの口癖。技術とともに「縁」もしっかりと次代へ受け継がれています。